

2019 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	坂口 幸弘
研究テーマ	死別の悲しみとともにより良く生きるための知恵 ーパターン・ランゲージの手法による体系的記述ー

< 助成研究の要旨 >

【緒言】

近年、遺族支援(グリーフケア)の取り組みは、わが国でも広く展開されてきている。社会的関心も高まりつつあるが、今後のさらなる発展のためには「質の高い」遺族支援の探求が必要である。本研究では、遺族支援の質を高めることを目標に、当事者遺族や支援者の体験的な知恵に注目する。

悲しみとともに生きるための個々の遺族のさまざまな知恵や工夫は、遺族会などの場で体験談として語られたり、書籍等でも散見される。こうした体験に基づく知恵や工夫、いわゆる「体験知」は多数存在するが、体系的にはまとめられていない。そこで本研究では、パターン・ランゲージの手法を用いて、死別の悲しみに向き合ううえでのヒントとなり得る体験知を集約し、言語化する。

【目的】

本研究の目的は、①「死別の悲しみとともにより良く生きるための知恵」のパターン・ランゲージ(共通言語)を作成すること、②遺族支援のためのツールとして、体系的に記述された体験知を印刷したカードを制作し、その臨床的有効性を検証することである。

【研究1】

井庭(2011)の手法に従い、第一段階「パターン・マイニング」では、当事者や支援者によって執筆された和書・翻訳書のレビューと、複数の当事者遺族・専門家等によるブレーンストーミングに基づき、体験知を洗い出した。そして、KJ法を用いて、要素間の関係性も考慮しながら、体験知を整理・分類し、パターンを作成した。第二段階「パターンライティング」では、パターンの種それぞれについて、パターン名/導入分/状況/問題/解決策/結果といったパターンの形式に沿って記述した。そして、第三段階「パターンの改善」では、作成したパターンの種の記述について、遺族会運営者(当事者遺族含む)8名と、遺族支援に関する豊富な経験や知識を有する専門家5名を対象にヒアリング調査を実施し、改良を重ねた。

結果として、第一段階「パターン・マイニング」では、40冊の本から734の体験知を抽出した。そして、抽出された体験知を整理・分類し、約60のパターンの種としてまとめた。それを元に、第二段階「パターンライティング」と第三段階「パターンの改善」を行い、最終的に29のパターン・ランゲージが作成された。

【研究2】

2つの遺族会の協力を得て、研究1で作成した29のパターン・ランゲージをそれぞれ印刷した29枚のカードを使用したグループワークを試行的に実施した。計28名の遺族が参加し、参加遺族の性別は男性6名、女性22名で、平均年齢は46.2歳であった。実施にあたっては、研究の趣旨等を説明し、参加への同意を得た。なお本研究は、関西学院大学「人を対象とする行動学系研究倫理委員会」の承認を得て実施した。

参加遺族へのアンケートの結果として、会の全体満足度に関して、参加遺族28名のうち、15名が「とても満足」、11名が「満足」と回答し、不満足との回答はみられなかった。自由記述では、「話し出すきっかけにカードになっていた」「一枚のカードの言葉をテーマに話が広がった。いつもの分かち合いとは違う視点で話げできた。」などの回答がみられた。また、自らが死別の悲しみに向き合うために役に立つかどうかについては、8名が「とても役に立つ」、15名が「役に立つ」と回答した。

【結語】

パターン・ランゲージの研究手法を用いて、「死別の悲しみとともにより良く生きるための知恵」という個々の体験知を体系的に言語化し、29のパターン・ランゲージを作成した。その成果に基づき制作したカードは、遺族同士の体験の共有を促進する効果がみられ、遺族支援のための有益なツールとなりうることが示唆された。

今後の課題として、今回作成した29のパターン・ランゲージについて、分類の妥当性を検証するとともに、記述内容の改善を図っていく必要がある。また、遺族支援ツールとしてのカードに関しては、遺族会などでの具体的な活用法について検討を進めていくことが望まれる。